

平成22年 5月20日現在

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2005～2008

課題番号：17251002

研究課題名（和文） 熱帯アフリカにおける野生獣肉の利用に関する総合的研究

研究課題名（英文） Studies on Bushmeat Hunting and Use in Tropical Africa

研究代表者

市川 光雄（ICHIKAWA MITSUO）

京都大学・アフリカ地域研究資料センター・教授

研究者番号：50115789

研究成果の概要：

中央アフリカ森林帯の住民は、毎日平均 100-200g 程度の獣肉を消費している。野生獣肉は、タンパク源として重要なだけでなく、文化的、社会的にも高い価値が置かれている。近年、伐採活動等によって狩猟圧が従来の 4-5 倍に急増した地域があり、こうした地域では、稀少種を含む野生動物の極端な減少が懸念される。しかし、住民にとって高い価値を有する獣肉の利用を禁止することは住民の生活・文化を脅かすことになる。したがって、住民が持続的に動物資源を使用できるシステムを確立することが急務であるが、そのためには森林資源に対する住民の慣習的な権利を尊重し、住民自身が動物資源の保全的利用の担い手となるような仕組みが必要である。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	10,100,000	3,030,000	13,130,000
2006 年度	8,400,000	2,520,000	10,920,000
2007 年度	7,800,000	2,340,000	10,140,000
2008 年度	8,400,000	2,520,000	10,920,000
年度			
総計	34,700,000	10,410,000	45,110,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：熱帯雨林；野生動物；タンパク源；社会・文化的背景；獣肉取引；持続的狩猟

## 1. 研究開始当初の背景

熱帯アフリカにおける野生獣肉（ブッシュミート）の消費量は膨大な量に達し、水産資源の乏しい中央アフリカ内陸部では、約 3,000-4,000 万人が野生獣肉にタンパク源を依存していると言われる。とくに近年では、森林伐採や道路網の整備、消費経済の浸透等によって獣肉の商業化が進み、獣肉に対する

需要が急増しており、このままでは大型類人猿等の稀少動物種だけでなく、森林性哺乳類全般の極端な減少をもたらすことが危惧されている。アフリカでは各地でこのような状況に対処するために、住民による狩猟活動が厳しく制限されようとしている。熱帯雨林生態系や生物多様性の保護は人類が共通して取り組まなければならない問題であるが、こ

こでも、そのようなグローバルな課題と地域住民の関心の間に大きな亀裂が存在し、それが保護計画の推進者（現地政府、国際NGO）と地域住民の間の鋭い対立となってあらわれている。保護計画の推進者は、狩猟と獣肉取引に替わる生活手段を与えることが自然保護の実現にとって不可欠と力説してきたが、代替のタンパク源や現金収入源を与える計画が遅々として進まないのに対して、野生獣肉への依存は高まる一方である。このままの勢いで獣肉取引が拡大すれば、いずれ野生動物そのものが減少し、それに依存する地域住民自身の生活が脅かされるのは明白である。このような状況にありながら、この地域の住民による獣肉利用の実態やその社会的、文化的背景、利用における変化とその背景、あるいは、狩猟に代わる野生動物の保全的利用に関する情報が欠如していた。

## 2. 研究の目的

本研究では、自然保護に対する従来の発想を逆転させ、単に野生動物を保護するのではなく、野生動物の利用を通して地域住民の生活を維持・向上させるとともに、地域の動物相の保全的利用の体制を確立する道を検討する。すなわち、自然保護のために野生獣肉の利用を禁止するのではなく、住民にとっての狩猟と野生獣肉の文化的、経済的な意義を再認識し、その需要が近年急速に増加した経済的、社会的・文化的背景を明らかにした上で、野生獣肉の保全的利用を可能にするための条件を検討する。同時に、野生獣肉の利用を、エコツーリズム等の他の利益還元型の自然保護計画と対照させ、それらの計画における住民の生活・文化への配慮や自然保護に対する役割、住民の主体的参加の可能性等について比較検討することを目的とする。

## 3. 研究の方法

近年急速に野生獣肉（ブッシュミート）の利用と商業化が進んでいるカメルーン等の中央アフリカ地域を主たる調査対象に選び、以下の点に関する現地調査を行うとともに、ガボン、ギニア等において、エコツーリズム等の野生動物の保全的利用に関する比較調査を実施した。

（1）地域社会における野生獣肉の利用の実態とその意義と変化に関する調査

カメルーン国東部州のブンバーベク国立公園地区周辺において、獣肉利用の実態とその文化的、社会的意義に関する現地調査を行った。

（2）野生獣肉取引の拡大の経緯とその社会、経済的背景

獣肉消費と交易活動に影響を及ぼしてい

る経済状況の変化を把握するための資料を収集した。

（3）持続的狩猟の社会的条件・地域社会の民族・社会関係

調査地域におけるコミュニティ・フォレストや共同狩猟区などの実施状況とそこにおける問題点についての情報を収集し、野生動物資源をめぐる地域社会の多様な利害関係についての問題点を整理した。

（4）利益還元型で資源保全的な動物利用の実態とその問題点

ギニアやガボン等における野生動物観察を対象にしたエコツーリズムや、カメルーン北部におけるスポーツ・ハンティングとそれらの問題点について調査を行った。

## 4. 研究成果

（1）野生獣肉の重要性

中央アフリカの熱帯雨林地域の住民は、主として森林性有蹄類を対象とする狩猟をおこない、農耕民では一人一日平均100グラム、狩猟採集民の場合は100-200グラム程度の獣肉を消費している。都市ではせいぜい数十グラムほどの消費であるが、人口が多いので全体としてみれば相当な量が消費されていることになる。

獣肉は単なる「タンパク質」の供給源ではない。獣肉に対する飢餓感、通常の空腹とは異なる特別な名称で呼ばれ、その分配・贈答は社会関係の潤滑油として、人々の日常生活における最大の関心事の一つとなっている。また、性別や従事する生計活動、人生における位置などによって忌避すべき動物の肉があり、結婚や葬送などの儀礼に際しても欠くことができないなど、大きな社会的・文化的負荷を帯びた食物である。さらに都市住民の間では、獣肉は「故郷の食べもの」、「野生の力」を与えるものとして、時には畜肉や魚などよりも高い価値が与えられている。

高い価値を有する獣肉は、地方住民にとって手軽な現金収入源や、農業労働力を確保する手段となっている。また、最近では、西欧諸国においても、アフリカ系住民の移動や食文化のグローバル化等に伴って、年間何万トンにも及ぶ野生獣肉がさまざまな方法で「輸入」され消費されており、野生動物保護や保健・衛生の面から問題視されている。

近年の獣肉消費の増加の背景として、このような獣肉に対する人々の強い文化的嗜好と経済的状況の変化があげられた。

（2）近年における変化

獣肉に対する強い嗜好が都市における需要と、都市に向けての獣肉の搬出と交易を促している。とくに、1990年代に入って伐採活動が拡大したカメルーンやコンゴ等では、道

路網の整備や消費経済の浸透などによって、獣肉の交易が急速に盛んになった。カメルーン東部州での動物個体数や狩猟活動に関する実態調査では、伐採活動が始まると新しい道路を伝って、人口数百人の村に30-40人もの交易人が到来したことが観察された。活発な交易活動によって、短期間のうちに、狩猟に用いる罠の数は伐採以前の4倍にも増加し、捕獲量も4倍近くに急増した。狩猟場の外延的拡大によって狩猟効率は維持されていたものの、狩猟動物の生息密度調査からは、持続的狩猟が可能な狩猟圧を大幅に越えていることが指摘された。また、カカオなどの商品作物栽培が盛んな地域では、農業生産拡大の鍵となる労働力を確保する手段として獣肉が用いられていることが判明した。さらにコンゴ民主共和国の事例からは、過剰な狩猟圧のために野生動物が極端に減少する「森林の空洞化現象 (empty forest syndrome)」が進んでいることが示された。

これらの調査からは、地域住民による自給的な狩猟のレベルでは持続性が保たれていたが、都市を含む広域の需要を満たすために行われている近年の獣肉商業化は、野生動物の減少を招き、獣肉に依存する地域住民自身の生活を脅かすものとなるため、早急に商業的狩猟に対する規制が必要であることが指摘された。そして、狩猟と獣肉取引の規制にあたっては、住民自身が動物資源管理の担い手であり、受益者となるために、動物資源に対する慣習的権利の確立が重要であることが指摘された。こうした指摘を踏まえて、新たな科研費プロジェクト「アフリカ熱帯林における慣習的権利の確立と多民族共存に関する研究」が構想され、実施されている。

### (3) 利益還元型の野生動物利用

西欧社会における「スポーツ」としての狩猟は、もともと貴族や新興ブルジョワジーの趣味であったが、最近になって、それを、自然保護を支えるツール、すなわち自然保護に要する経費の捻出と保護区周辺住民の貧困削減のための方途として利用する試みがアフリカ各地で実施されている。これは、住民自身に狩猟を断念させ、その代わりに、自然保護のための資金や、狩猟から得た収入の分配や雇用機会を確保しようというものである。しかし、カメルーン北部におけるスポーツ・ハンティングの実態調査から、これが、住民の狩猟文化や獣肉の過小評価につながることで、このスキームによって利益を被るのは一部の住民に過ぎないことなどの問題点があることが研究協力者によって明らかにされた。

一方、狩猟にかわる動物資源の非消費的利用として、エコツーリズム等の計画がアフリカ各地で進んでいる。ギニアやガボンでは、

チンパンジーなどの野生動物の生態や行動の観察を観光資源化する試みが行われているが、東アフリカのように事業としての成功をおさめてはいない。そうしたなかで野生動物を保全利用するためには、まず、住民と動物との間に良好な共存関係が必要であることが指摘された。

### (4) 国際シンポジウム

上記研究成果に関して、2件の国際シンポジウムを開催した。

① 国際シンポジウム「*Biological Conservation and Local Community's Needs: Lessons from Field Studies on Nature-Dependent Societies* (生物保護と地域社会のニーズ：自然依存社会のフィールドワークから)」。カメルーン科学省、日本大使館、京都大学の共催により、2009年2月7日に、カメルーン国首都のヤウンデにおいて開催し、研究成果の現地還元と現地からのフィードバックを行った。詳細は以下を参照。

<http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/CameroonFS/wiki.cgi?page=%B8%A6%B5%E6%B3%E8%C6%B0#p3>

② 国際シンポジウム「*Persisting Cultures and Contemporary Problems in the Congo Basin* (コンゴ盆地森林住民の文化と現代的課題)」。2010年3月13日に京都大学稲盛財団記念館において開催。詳細は、

[http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/kiroku/sympo\\_congo.html](http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/kiroku/sympo_congo.html) を参照。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計23件)

- (1) 市川光雄, 2010 (印刷中) 「熱帯雨林保護と先住民問題」『総合人間学』第4巻 (査読なし)
- (2) 市川光雄, 2010 「人間の生活環境としての熱帯雨林—歴史生態学のアプローチ」『文化人類学 (旧民族学研究)』74(4): 567-585. (査読あり)
- (3) Yamagiwa J., 2010 “Gorillas: The quest for coexistence,” *The Japan Journal* 6 (10): 27-29. (査読なし)
- (4) Lingomo B. and D. Kimura, 2009 “Taboo of eating bonobo among the Bongando people in the Wamba region, Democratic Republic of Congo,” *African Study Monographs* 30(4): 209-225. (査読あり)
- (5) Hockings K. J., Yamakoshi G., Kabasawa A., Matsuzawa T., 2009 “Attacks on Local Persons by Chimpanzees in Bossou, Republic of Guinea: Long-term Perspectives,” *American Journal of*

- Primate Eye* 71: 1-10. (査読あり)
- (6) 山越言, 2009 「野生動物とともに暮らす知恵: 西アフリカ農村の動物観とチンパンジー保全」 『ヒトと動物の関係学会誌』 23: 22-26. (査読なし)
- (7) Yasuoka, H., 2009 “Concentrated distribution of wild yam patches: Historical ecology and the subsistence of African rainforest hunter-gatherers,” *Human Ecology* 37(5): 577-587. (査読あり)
- (8) 坂梨健太(研究協力者), 2009 「カメルーン南部熱帯雨林におけるファンの農耕と狩猟活動」 『アフリカ研究』 74: 37-50. (査読あり)
- (9) Yamakoshi G., Koops K., 2008 “Life history profiles of female chimpanzees in Bossou over 40 years,” *Primate Eye* 96: 305 (査読なし)
- (10) 末原達郎, 2008 「文明としての食料生産」 『農業と経済』 増刊号: 20-30. (査読あり)
- (11) 安田章人(研究協力者), 2008 「自然保護政策におけるスポーツ・ハンティングの意義と住民生活への影響」 『アフリカ研究』 73: 1-15 (査読あり)
- (12) 安田章人(研究協力者), 2008 「狩るものとしての「野生」: アフリカにおけるスポーツ・ハンティングが内包する問題」 『環境社会学研究』 14: 38-53. (査読あり)
- (13) Tashiro, Y., G. Idani, D. Kimura and L. Bongoli, 2007 “Habitat changes and decreases in the bonobo population in Wamba, Democratic Republic of the Congo,” *African Study Monographs* 28(2): 99-106. (査読あり)
- (14) 安岡宏和, 2007 「アフリカ熱帯雨林における狩猟採集生活の生態基盤の再検討」 『アジア・アフリカ地域研究』 6(2): 297-314. (査読あり)
- (15) Ichikawa, M., 2006 “Problems in the Conservation of Rainforests in Cameroon,” *African Study Monographs Supplementary Issue* 33: 3-20. (査読あり)
- (16) 山越言, 2006 「野生チンパンジーとの共存を支える在来知に基づいた保全モデル」 『環境社会学研究』 12: 120-135. (査読あり)
- (17) Suehara, T., 2006 “Labor Exchange Systems in Japan and DR Congo: Similarities and Differences,” *African Studies Quarterly* (on line journal) 9-1&2: 1-12. (査読あり)
- (18) Kitanishi, K., 2006 “The impact of cash and commoditization on the Baka hunter-gatherer society in southern Cameroon,” *African Study Monographs Supplementary Issue* 33: 121-142. (査読あり)
- (19) Yasuoka, H., 2006 “Long-term foraging expeditions (*molongo*) among the Baka hunter-gatherers in the northwestern Congo Basin,” *Human Ecology* 4(2): 275-296. (査読あり)
- (20) Yasuoka, H., 2006 “The sustainability of duiker (*Cephalophus* spp.) hunting for the Baka hunter-gatherers in southeastern Cameroon,” *African Study Monographs Suppl. Issu.* 33: 95-120. (査読あり)
- (21) 安岡宏和, 2006 「方法としての生態人類学」 『アフリカ研究』 69: 155-156. (査読あり)
- (22) Ngima Mawoung, Godefroy, 2006 “Perception of hunting, gathering and fishing techniques of Bakola of the coastal region, southern Cameroon,” *African Study Monographs, suppl. Issu.* 33: 49-69. (査読あり)
- (23) Ichikawa, M., 2005 “The History and Current Situation of Anthropological Studies on Africa in Japan,” *The African Anthropologist* 12(2): 158-171. (査読あり)
- [学会発表] (計 13 件)
- (1) Ichikawa, M., “Forests and Indigenous People in the Post-conflict Democratic Republic of Congo,” International Symposium “Question of Poverty and Development in Conflict and Conflict Resolution”, Ryukoku Univ., Kyoto, November 9, 2008.
- (2) Ichikawa, M., “Problems in the Study of Ecological Anthropology in Central African Forests,” Seminaire ecologique, CEFE, Montpellier, France, June 15, 2008.
- (3) Ichikawa, M., S. Hattori and H. Yasuoka, “Environmental Knowledge among Central African Hunter-gatherers,” 73rd Annual Meeting of SAA, Vancouver, Canada, March 29, 2008.
- (4) Yamakoshi, G. & K. Koops, “Life history profiles of female chimpanzees in Bossou over 40 years,” XXII Congress of the International Primatological Society, Edinburgh, UK, August 8, 2008.

- (5) Suehara, T., “*L’Agriculture de la culture et l’ agriculture de l’ economie, L’ agriculture participative,*” 2em Colloque international du Programme de Recherche d’ interet Regional Vente Directe Bretagne Japon, Universite de Renne 2, Haute Bretagne, France, November 7, 2008.
- (6) Yamakoshi, G., “*Ecology and History of Peri-Village Forest in the Forested Guinea, West Africa,*” International Symposium, Forest Stewardship and Community Empowerment: Local Commons in Global Context, Kyoto International Community House, Kyoto, October 11, 2007.
- (7) 山越言, 「霊長類学にとっての人間＝ヒト問題：野生チンパンジー研究からの視点」第23回日本霊長類学会大会『人間＝ヒトの謎をめぐる』滋賀県立大学, 滋賀県, 2007年7月16日.
- (8) 市川光雄, 「アフリカ狩猟採集民の狩猟」日本旧石器学会シンポジウム（記念講演）『旧石器時代の狩猟を考える』東京都, 2006年6月15日.
- (9) Yamakoshi, G., “*An indigenous concept of landscape management for chimpanzee conservation at Bossou, Guinea,*” Kyoto Symposium 2006, Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies, Kyoto, Japan, November 11, 2006.
- (10) 山越言, 「ギニア共和国ボソウ村における精霊の森の生態史」第43回日本アフリカ学会学術大会, 大阪大学, 大阪府, 2006年5月27日.
- (11) Ichikawa, M., “Problems in the Study of Man-Nature Relationships in Central African Forests: An Anthropological Perspective,” JASTE-JCAS, Kyoto Univ., Kyoto, June 13, 2005.
- (12) Yamakoshi, G., “*What is happening on the border between humans and chimpanzees?*” The 7th Kyoto University International Symposium, 2005: “Coexistence with Nature in a ‘Glocalizing’ World,” Bangkok, Thailand, November 24, 2005.
- (13) Yasuoka, H., “*The bushmeat hunting boom in a village of the Baka hunter-gatherers in southeast Cameroon,*” The 7th Kyoto University International Symposium, 2005: “Coexistence with Nature in a ‘Glocalizing’ World,” Bangkok,

Thailand, November 24, 2005.

〔図書〕（計23件）

- (1) 市川光雄, 2010「アフリカ熱帯雨林の歴史生態学に向けて」木村大治・北西功一編『森棲みの生態誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 I』京都大学出版会, pp. 101-118.
- (2) 木村大治・北西功一（編著）, 2010『森棲みの生態誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 I』京都大学学術出版会, xvi+425pp.
- (3) 木村大治・北西功一（編著）, 2010『森棲みの社会誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 II』京都大学学術出版会, xiii+388pp.
- (4) 木村大治・安岡宏和・古市剛史, 2010「コンゴ民主共和国・ワンバにおけるタンパク質獲得活動の変遷」木村大治・北西功一編『森棲みの生態誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 I』京都大学学術出版会, pp. 333-351.
- (5) Yamakoshi, G., in press (2010) “The ‘prehistory’ before 1976: Looking back on three decades of research on Bossou chimpanzees,” In: T. Matsuzawa (ed.) *The Chimpanzees of Bossou and Nimba: A Cultural Primatology*, Springer-Verlag Tokyo, Tokyo.
- (6) Yamagiwa, J., 2010 “Coexistence des gorilles et des chimpanzés,” In: Caldecott J, and L. Miles (eds), *Atlas Mondial des Grands Singes et Leur Conservation*, UNESCO, Paris, pp. 149.
- (7) 北西功一, 2010「アフリカ熱帯林とグローバリゼーション」木村大治・北西功一編『森棲みの生態誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 I』京都大学学術出版会, pp. 59-76.
- (8) 北西功一, 2010「アフリカ熱帯林の社会（2）—ピグミーと農耕民の関係—」木村大治・北西功一編『森棲みの社会誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 II』京都大学学術出版会, pp. 21-46.
- (9) 北西功一, 2010「所有者とシェアリング—アカにおける食物分配から考える—」木村大治・北西功一編『森棲みの社会誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 II』京都大学学術出版会, pp. 263-280.
- (10) 小松かおり, 2010「中部アフリカ熱帯雨林の農耕文化史」木村大治・北西功一編『森棲みの生態誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 I』京都大学学術出版会, pp. 41-58.
- (11) 小松かおり, 2010「森と人が生み出す生物多様性」木村大治・北西功一編『森棲

- みの生態誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 I』京都大学学術出版会, pp. 221-242.
- (12) 小松かおり, 2010「アフリカ熱帯林の社会 (2)」木村大治・北西功一編『森棲みの生態誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 II』京都大学学術出版会, pp. 3-20.
- (13) 安岡宏和, 2010「バカ・ピグミーの狩猟実践—罫猟の普及とブッシュミート交易の拡大のなかで」木村大治・北西功一編『森棲みの生態誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 I』京都大学学術出版会, pp. 303-331.
- (14) Ichikawa, M., 2009 “Forests and Indigenous People in Post-conflict Democratic Republic of Congo,” In : Kato, G. and A. Uyar (eds.), *Question of Poverty and Development in Conflict and Conflict Resolution*, Afrasian Studies, Ryukoku University, pp. 211-226.
- (15) 山越言, 2009「ギニア南部森林地域における村落林の生態史—ドーナツ状森林の機能と成因」池谷和信編『地球環境史からの問い』岩波書店, pp. 208-216.
- (16) 末原達郎, 2009『文化としての農業 文明としての食料』人文書館, 280pp.
- (17) 市川光雄, 2008「ブッシュミート問題：アフリカ熱帯雨林の新たな危機」林良博・森裕司・秋篠宮文仁・池谷和信・奥野卓司編『講座ヒトと動物の関係学第4巻 野生と環境』岩波書店, pp. 163-184.
- (18) 市川光雄, 2008「ムブティ・ピグミー：森の民の生活とその変化」福井勝義・竹沢尚一郎編『ファースト・ピープルズ～世界先住民族の現在第5巻 サハラ以南アフリカ』明石書店, pp. 252-268.
- (19) 山極寿一, 2008「野生動物とヒトとの関わり現代史—霊長類学が変えた動物観と人間観」林良博・森裕司・秋篠宮文仁・池谷和信・奥野卓司編『ヒトと動物の関係学第4巻 野生と環境』岩波書店, pp. 69-88.
- (20) Ichikawa, M., 2007 “L’ évitement alimentaire des viandes d’ animaux sauvages chez les chasseurs-cueilleurs d’ Afrique centrale,” In: Dounias, E., Motte-Florac, E. et Mesnil, M. (eds.) *Le symbolisme des animaux - (Colloques et Séminaires-IRD)*, Paris, pp. 837-849.
- (21) 山極寿一, 2007『暴力はどこからきたか—人間性の起源を探る—』NHK ブックス, 244pp.
- (22) 末原達郎, 2007「地球規模で食料・農業

- を考える」野田公夫編『生物資源問題と世界』京都大学学術出版会, pp. 3-35.
- (23) Ichikawa, M., 2005 “Food Sharing and Ownership among the Central African Hunter-gatherers: An Evolutionary Perspective,” In: Widlok, T. and W. Tadasse (eds.), *Property and Equality*, Oxford: Berghahn, pp. 151-164.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

市川 光雄 (ICHIKAWA MITSUO)  
京都大学・アフリカ地域研究資料センター・教授  
研究者番号:50115789

### (2) 研究分担者

木村 大治 (KIMURA DAIJI)  
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授  
研究者番号:40242573

山越 言 (YAMAKOSHI GEN)

京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授  
研究者番号 00314253

山極 寿一 (YAMAGIWA JUICHI)

京都大学・大学院理学研究科・教授  
研究者番号: 60166600

### (3) 連携研究者

末原 達郎 (SUEHARA TATSURO)  
京都大学・大学院農学研究科・教授  
研究者番号: 00179102

寺嶋 秀明 (TERASHIMA HIDEAKI)  
神戸学院大学・人文学部・教授  
研究者番号: 10135098

北西 功一 (KITANISHI KOICHI)

山口大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 80304468

小松 かおり (KOMATSU KAORI)

静岡大学・人文学部・准教授  
研究者番号: 30334949

安岡 宏和 (YASUOKA HIROKAZU)

法政大学・人間環境学部・講師  
研究者番号: 20449292

### (4) 研究協力者

服部 志帆 (HATTORI SHIHO)  
京都大学・大学院理学研究科・学振特別研究員

安田 章人 (YASUDA AKITO)

京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・研究員

坂梨 健太 (SAKANASHI KENTA)

京都大学・大学院農学研究科・博士課程  
ンギマ マウオン ゴデフロイ (NGIMA MAWONG GODEFROY) ヤウンデ第一大学・人文社会学部・講師